遠藤周作賞
小林花穂「かいじゅうの町」

かいじゅうの町

忠生第三小学校　二年
小林（こばやし）　花穂（かほ）

よなかにぼくのへやのドアをトントンとたたく音がした。
ぼくは、すこしこわかったけどゆっくりドアをあけてみた。
すると、そこには、大きなかいじゅうがいた。
「きみはだれ？」とぼくは、聞いた。
「ぼくは、この町のかいじゅうだよ。きみをあんないしてあげる。」とかいじゅうは、言った。
ぼくは、かいじゅうと手をつないだ。かいじゅうの手は大きくてふわふわだった。
かいじゅうがぼくをつれていったのは、シバヒロだった。
「ここ知ってるよ。よくあそんでる。」とぼくは言った。
「ぼくも知ってる。」とかいじゅうは言った。
ぼくは、シバヒロのしばふとかいじゅうのおなかのふわふわは、なんだかにているなあと思った。
つぎは、町田えきででん車を見にいった。
「リニアカーも早く見たいね。」とかいじゅうが言った。
ぼくは、すこしつかれたのでかいじゅうのせなかにのった。せなかのしまもようは、でん車の線ろにているなあと思った。
つぎは、きれいな花が咲いているいけに行った。
「ここも行ったことがあるよ。花きれいだね。」とぼくは言った。
かいじゅうは、
「ぼくは、大むかし一人ぼっちでさみしくて大なきしたんだ。これはぼくのなみだがたまっていけになったんだよ。花がさいたらみんなが見にきてとてもうれしかった。」と言った。
そこに小さなリスたちがいっぱいやってきた。
「あっしょうかいするよ。ぼくのなかまたちすぐ近くにすんでいるんだ。」とかいじゅうは言った。リスのふわふわとかいじゅうのふわふわはいっしょだなあとぼくは、思った。
「そろそろじかんだね。」と言ってかいじゅうは、ぼくをへやまでおくってくれた。
「つづきはまたこんど。おやすみ」とかいじゅうはかえった。
ぼくたちは、もしかしてかいじゅうの上にすんでいるのかなあと思いながらねむった。

遠藤周作賞
小林花穂「かいじゅうの町」

あさになっておかあさんが、
「よなかにグオーグオーっていう音しなかった？」と言っていた。
それは、かいじゅうのいびきかも、とぼくは思った。

審査員講評＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

町田をかいじゅうに例えた心温まるファンタジー作品。ふわふわな手触りが伝わって、心が撫でられているような読み心地でした。かいじゅうの涙が池になったというのも美しくて神話のよう。オチのおちゃめさといい、全体的な世界観作りがとてもお上手だと思いました。

――藤岡みなみ